

【書評】

陳狷著『兩宋時期漢籍東伝日本論述稿』

大 瀧 貴 之

陳狷^{ちんちゆう}氏は、九州大学大学院人文科学府博士後期課程（中国文学）に学び、現在、広島大学文学部日本・中国文学語学講座（中国文学語学分野）において研究・教育に従事される。専門は、白居易を中心とした唐代文学及び東アジアにおける漢籍交流史であり、特に後者については日本の古記録や旧鈔本を駆使した研究に取り組まれている。

本書は、2021年11月に浙江人民出版社から「新中日文化交流史大系（第一輯）」中の一書として刊行された。陳氏には、先に『日宋漢籍交流史の諸相一文選と史記、そして白氏文集』（新・日中文化交流史叢書、大樟樹出版社、2019年6月）の著作（日本語）があり、宋代中国と平安時代中期から鎌倉時代の日本との間に行われた漢籍交流史について論じている。本書は、言わばその姉妹編にあたる。以下、全体像を概観するため、各章のタイトルを示す。なお、本書評は日本の読者に対する陳氏著書の紹介を主たる目的とすることもあり、同書からの引用にあたっては拙訳を以てし、原語を省略した。

序論 朝廷権力の威信の象徴—日本中古中世期の漢籍が帯びた重要な特性

第一章 『文選』と『白氏文集』—古代東アジアにおける漢籍変遷史についての一考察

第二章 日本所蔵旧鈔本の鑑定法について—『文選』と『白氏文集』を例として

第三章 鈔本から刊本へ—旧鈔本及び日本将来宋刊本『白氏文集』の校語に対する研究の意義

第四章 『文選集注』李善「上文選注表」掲載巻の復元と同書編者についての再考察

—旧鈔本『文選表注』を中心として

第五章 三善為康撰「経史歴」の文献的価値について

—併せて唐末五代期の大規模出版の可能性を論じる

第六章 蕭統『文選』の文体分類とその文体観について

—『二中歴』所収古本『文選』の目録を中心として

第七章 唐末五代期の大規模出版の可能性に関する再考察

—『二中歴』所収「文選篇目」を例として

第八章 鎌倉期における刊本将来に関する総合的考察—併せて金沢文庫創建の経緯について

第九章 蔵書と読書—平安期の天皇及び貴族の読書に関する史料彙編稿

後記

各章の要点を紹介しつつ、幾らかの短評を付す。

序論は、日本伝存の漢籍を資料に展開される日中両国の研究成果を踏まえたうえで、そこに多く見受けられる誤解や錯誤を指摘する。すなわち、中国から中古中世期の日本にもたらされた漢籍について、購入による受容と見ること、遣唐使による将来を第一と見ること、受容された漢籍が広く日本に流布したとみること、以上の三点である。当該時期において、書籍は貿易商品ではなく、中国に長期滞在した留学生・留学僧が、その日本将来に大きく貢献したこと、将来された漢籍は威信財であり、天皇を頂点としたごく限られた範囲のみで受容されていたこと、これらの点について日本の史資料に依拠して論じる。第一章以下の各論を考察するに至った前提を整理するとともに、近年盛んな域外漢籍研究にまま見受けられる瑕疵を指摘し、斯界の議論をより正確にしたいとの著者の意図が窺われる。

第一章は、『文選』と『白氏文集』の二書を東アジア漢籍文化圏の形成に寄与した重要典籍と位置づけたうえで、古代日本において文範集成としての受容対象が、『文選』から『白氏文集』へと移行したことを論じる。本章の最大の特徴は、その移行の背景として『白氏文集』自体が『文選』を継承すべき意識のもと白居易によって編集されていたと主張する点にある。日本の類書『二中歴』に収録された三十巻本『文選』の篇目と金沢文庫本『白氏文集』に拠って知られる白居易原撰時の文体分類とを比較し、両者の相似性から議論を行う。また、移行の理由には日本における『文選』の古典化があったことも指摘し、『白氏文集』が文範集成として代替するとともに『文選』及びその注釈群が他の漢籍を注解する際の参考資料集となったことを論じる。本章の結びとして、日本文学史上、同様の現象が観察されるとし、奈良時代の『文選』から平安時代の『白氏文集』、五山文学盛行期の『蘇東坡集』、江戸時代の『唐詩選』への移行とその前に盛行していた書籍の大型辞典化を指摘する。評者としては、所論の論点以外に、各期の同時代中国における流行書籍との関係及び各期の文学活動に参画した漢籍受容層にとつての難易度といった観点が念頭に浮かぶが、単純に過ぎるか。

第二章は、本書が考察の主要な材料とする日本所蔵旧鈔本について、主に中国の研究者を対象とした概説に相当する。旧鈔本に関する日本の先行研究を、料紙、筆、墨、書風、書式、校語等に見える略号、装丁といった鑑定に必要な項目を網羅しつつコンパクトにまとめる。本章冒頭には、「古鈔本」と「旧鈔本」という二つの術語の混用に起因した日中間における資料理解の齟齬について問題提起がなされる。著者は、神鷹徳治氏の定義に基づき、日本所蔵の「古鈔本」について、中国より将来された「唐鈔本」に対し、日本の文人や僧侶が書写した古写本（概ね奈良から室町期の書写で、隋唐写本を底本とする）を「旧鈔本」と呼ぶべきことを主張する。論述に当たっては、著者が旧鈔本研究の過程で実際に目にした『文選』と『白氏文集』から具体的な事例が図版とともに示されており、読者の理解を深めるのに寄与している。

第三章では、巻軸装の鈔本（手書き本）から冊子体の刊本への転換時に生じたであろう諸問題のうち、特に巻頭の収録作品数標記に焦点をあてて論じる。はじめに、その転換の時期について考察される。通説では、巻軸鈔本から冊子刊本への転換は、北宋ないし南宋に生じたとされる。著者はニューヨークのメトロポリタン美術館が所蔵する南唐・周文矩画『琉璃堂人物図』中に描写された書籍の形態に着目し、唐末五代十国期には既に転換が行われていた可能性を指摘、これが『二中歴』中の五代宋初の印本に関する記録と符合することを論じる。次に、『白氏文集』を例に、転換期に生じた諸問題

の一つとして巻頭の収録作品数標記に関する問題を取り上げる。『白氏文集』では、各巻頭に収録作品数が標記されるが、実際の収録作品数との間に些少なながらも差異を見せる場合がある。この現象について著者は、日本伝存の旧鈔本及びそこに書き入れられた校語（北宋本との対校結果を記す。唐鈔本と北宋刊本間の文字異動等の程度は南宋本とのそれに比して小さい）に基づき、鈔本から刊本への移行時に、本来一首である作品を誤認して二首に分割したり、また逆に二首を一首と誤認したりしたことに起因すると論じる。また、この現象に対する考察が単に『白氏文集』に関する研究に止まるものではなく、『文選』所収「古詩十九首」や李白「清平調三首」といった現在自明のものと捉えられている作品（群）について、何を一群、一連の作品と見るかについて、鈔本刊本移行期の改変に留意し、再考する必要があることを主張する。なお、本章の論証過程では、白居易による文集自編の過程及び完成した文集の伝世過程について概述されており、文集の成立と伝存に関する陳氏の考えを把握するのに便利である。章末には、巻頭作品数標記に対する謝思煒校注本（今日、通行本として機能）の校語と著者の案語が一覧表にまとめられる。

第四章は、日本の国宝『文選集注』に関する議論。旧鈔本の一つである九条本『文選』の李善「上文選注表」の行間、欄外、紙背に見える注（著者はこれを『文選集注』由来のものとする）、及び著者が慶應義塾図書館において発見した新資料『文選表注』（著者に拠れば、これは『御注文選表解』（国会図書館所蔵本、京都建仁寺両足院所蔵本）の底本たる『御注文選表』とのこと）を主たる材料に、詳細な事例を一覧表として挙げながら『文選集注』巻首にあるべき李善「上文選注表」を復元する。そのうえで、復元結果をもとに『文選集注』の編者は大江匡衡であること、匡衡私撰の文選注が一条天皇の重視を受けて御注（天皇の命による編纂物）となり、『文選集注』として成書する過程を論じる。議論の過程では、著者が過去に日本の古記録や公家等の日記、日本の旧鈔本『文選』に依拠しておこなった一連の議論が踏まえられており、先にそれらを把握しておかなければ議論に追いつけない虞がある。本章冒頭の注1に挙げられた静永健・陳狷共著『漢籍東漸及日蔵古文献論考稿』（域外漢籍研究叢書第二輯、中華書局、2011年）のほか、本書評ではじめに紹介した『日宋漢籍交流史の諸相—文選と史記、そして白氏文集』を参照されたい。

第五章は、『二中歴』中の「経史歴」に依拠して唐末五代期の大規模出版について論じる。『二中歴』は、鎌倉初期の文人が、平安中後期の学者三善為康・行康父子の著作『掌中歴』・『懷中歴』より抄出して成った類書である（事典或いは辞書とも説明される）。その第十一「経史歴」の「書史卷数」には、百三部の書籍の書目及び卷数等が記録され、「唐摺本」と記されている。「摺本」とは印本を意味する。当該記録には、『日本国見在書目録』に未収の書籍が多く含まれ、また、北宋監本の卷数等とも異動がある。著者はこれに着目し、当該記録中の百三部の印本は、『日本国見在書目録』編纂の平安寛平年間すなわち唐の昭宗期以降、北宋以前の刊行に係るものと推論し、唐末五代期に現在の中国印刷史研究では把握されていない大規模な出版活動があった可能性を論じる。より具体的には、北宋初に宋太祖が成都で『大蔵経』を開版させた史実と関連付け、後蜀における出版であったことを想定する。「経史歴」の記録は、唐鈔本及び印刷史上最初期の五代刻本の原型を考察する手がかりとなること、平安中期以降の大学博士による注釈活動には唐末五代刻本が大いに使用された証拠となること、中国の南宋

刊本系統の本文重視に対し平安以降の日本では唐鈔本系統の本文が重視されたという誤った固定観念を打ち崩す可能性があること、これらの点で当該資料の価値は極めて高く、大いに研究に活用されるべきことが主張される。

第六章は、前章につづき『二中歴』に残る書誌情報を活用した研究。焦点があてられるのは、『文選』の文体分類と文体観である。『二中歴』第十一「経史歴」には、「文選篇目」と題された三十巻本『文選』の目録（現在通行の六十巻本のそれに対して「古目録」と呼称）が収録される。『文選』の文体分類については、清人から近人に至るまで議論が活発におこなわれ、三十七類、三十八類、三十九類の各見解が示されてきた。ただし、それらはいずれも六十巻本に基づく議論である。当該「古目録」及び三善為康が唐鈔本と北宋刻本との校異結果を記した案語を根本に据えて考察することで、蕭統の文体分類と背後にある文体観について正確な議論が可能になることを主張する。古目録に拠れば、三十巻本『文選』は、「離騷経」をそれ単体で「離騷」という一つの文体に分類し、その他の『楚辞』作品は、「歌」類に収録する。分類は、「賦」「詩」と始まって「離騷」が続く。ここには、班固等の北方系文人により体系化された『詩経』から漢賦という伝統的文学観に対し、南朝梁の蕭統が、經典『詩経』の重視は維持しつつも「離騷」から漢賦へという新しい文学観を提唱しようとした意図が反映されると論じ、「離騷」に代表される南方文学が決して『詩経』に代表される北方系文学の支流などではないという南朝王朝としての確固たる国家理念が存在したことを主張する。また、「歌」類の確立により、南方音楽すなわち呉歌西曲について、『楚辞』を源流とした正統的文学観を打ち立てようとしたことが論じられる。

第七章は、唐末五代期における大規模出版についての再論。第五章の所論に関し、「唐摺本」の表記が唐末五代期の印本を指し示すという自説を『二中歴』第十一「経史歴」「書史卷数」に記録された三十巻本『文選』を例に論証し、補強する。また、平安時代の大学寮における漢学について紹介されるほか、旧鈔本の利用にあたっては影印や他人の手になる翻刻を無批判に利用するのではなく、可能な限り原書に当たるべきこと等、旧鈔本の利活用を促進するための情報や留意点がまとめられる。

第八章は、鎌倉期の宋刻本将来について史資料をもとに状況を整理したうえで、金沢文庫創建の経緯について論じる。大要は以下のとおり。現在、日本に所蔵される宋本（残本、断簡を含む）は、平安鎌倉期以来日本に伝存するとされるものと二十世紀に中国大陸より購入されたものに大別される。このうち、前者には偽書も少なくないことに注意が必要である。日本の古い書目に偽作があることにも留意しなければならない。平安鎌倉期において、宋本及び影写本、転写本は極めて貴重なものであり、将来された場合には何らかの記録が残っていると考えて差し支えない。北宋政府の書籍管理は厳格であり、国外持ち出しには皇帝の裁可が必要であった。北宋本の日本将来が少ないことは、藤原道長の日記にも明白である。南宋では仏典の国外持ち出しが割合緩やかになった一方で経史別集の類は依然として厳格に管理されていた。そうであれば、鎌倉室町期の史料に窺える数々の宋刊本は、如何なる経緯で日本に将来されたのか。これには金沢文庫の創設が大きく寄与している。東京大学史料編纂所所蔵の古鈔本『(文明明応年間) 関東禅林詩文等抄録』所収「賀長尾平五公檢金沢文庫禅詩軸并序」の記述を踏まえて考察すれば、金沢文庫の創建者を北条実時とする通説を補強できるほか、宋刻本の

大量購入は北条家が船を仕立てておこなったものであることが明瞭となる。また、『吾妻鏡』や『管見抄』巻末跋語の記述を総合して考察すると、この大量購入は、寛元の大火により北条家の蔵書が灰燼に帰した後、元との国際関係が悪化する以前の1259年から1266年の間に実行されたものと判断できる。その主な目的は、威信財としての宋本を執権北条家が大量所有することで、鎌倉幕府の権威を文武両面で確立することにあつた。以上のとおりである。中古中世日本において、漢籍が威信財としての特性を持っていたことを主張する本書において、主軸となる一章である。

第九章は、平安期の皇室及び貴族の読書史考察における基礎的資料として、著者が膨大な労力を傾けてまとめあげた書目稿である。『正倉院古文書所見漢籍書録史料編年集成稿』、『歴代天皇宸記所見漢籍書録史料編年集成稿』及び『平安時期公家日記所見漢籍書録史料編年集成稿』の三部（本書216頁～376頁）よりなる。著者の問題意識として、『日本見在書目録』等の書目に見える大量の漢籍は、あくまで蔵書目録であつて、決して読書目録ではないということがある。公権力の威信財としての漢籍は、決して容易にアクセスできるものではなかつた。天皇や貴族の読書の実態として如何なる漢籍が読まれていたのか、日記等の記述を丹念に拾い上げてまとめられたのが本章の書目稿である。読者が原資料に当たることが出来るよう出典（資料名や頁等）が逐一明示される。今後、日中両国における研究の進展に裨益するものとする。

以上、各章の要点について評者の所感を交えつつ紹介した。総じて、従来の研究が顧慮しない異分野の史資料を活用することや、通説の根拠資料を見直し、新資料に依拠して新たな論点及び主張を導き出していく研究手法に特徴がある。著者の主張、見解については、時にそれが革命的というべきものであるがため、当然賛否両面の大きな反応があるはずである。中国語により中国で出版された本書が、日本の中国学、日本文学、日本史学の諸先生方の目に、より触れやすくなることを企図して小文を草した。学術交流に些少なりとも資することができれば幸いである。